| 24 中 | 受験番号 |
| --- | --- |
| | |

# 国語　その一（八枚のうち）

## 一

次の文章は大正時代の北海道を舞台にした小説です。これを読んであとの質問に答えなさい。

私達の附属小学校は、その頃はまだ生徒の数が少くて、四年生まで男女一つ教室だった。烏帽子の上を折って、その折った先をわきで止めて、そこに毛糸の房を垂らしたような学帽が、私達と市内のほかの小学校の生徒とを一目区別していた。その毛糸の房が、四年生までは赤で、五年生からは白に変った。同時に教室は男生徒ばかりになった。四年生になると、同じ教室の半分を占めている女生徒の列が、急に自分達の注意を惹きはじめて来たことを、私達はうすうす感じていた。

四月の新学期の第一日、私達は朝礼の運動場から、長い廊下を、教室に向って帰って来た。私達の心も、外の世界も、すべてが一変して新しかった。先頭が、廊下に向って展いている、新しい教室の窓のあたりにさしかかると、自然、皆の足は早くなって、一時に列が乱れ出すのを誰もどうすることは出来なかった。戸が開くと同時に、わッという歓声が誰からともなくあがった。どやどやと雪崩れるように一とかたまりになって部屋のなかに駆け込んだ。てんでに、新しくきまった自分達の席について、机の上蓋をガタガタ云わせたり、椅子にかけたり立ったり繰り返してみながら、物珍らしそうに口々に何か云っていた。後ろの方がいいとか、前の方がいいとか、そういうことを云い合っていた。汚れた机の上に、ナイフの尖で彫った文字やものの形を見つけ出して、興がっているのもいた。そうかと思うと、小さな机をさかさまにして、なかのゴミなどを払い、いち早く掃除にかかっているものもあった。＊女生のなかにそういうのが多く見られた。今日から一年間、わが＊伴侶となるそのものへの愛着が、もう彼等のうちに兆し始めていることが、微笑ましくわきから眺められるのだった。

それらのなかにあって、私はひとりきわめて物静かだった。今度の席も私にとっては新しくて新しくなかった。それは、教壇に向って一番左の列の、一番後ろにあたっていた。そして私はこの前の教室にいた時からずっとそこにきまっていた。私は、その古くて新しい席について、黙って室内の＊喧噪を見廻しながら、充分満足であることが出来た。級長というものは常にこうでなければならない、と云ったような構えた心でいたわけではない。私は一体に普段から、おとなしい物静かな生徒であったのだ。

私の表面のおとなしさ、物静かさというものは次のことからも来ていた。大抵の地方に於てそうであるように、その北国の町でも、＊師範の附属小学校というのは町の多くの小学校のなかにあって特別な色彩を持っていた。役人や学者や物持ちや、町での上層階級の子供を最も多く集めているという特色である。毎年の中等学校の入学者の率が一番いいとか、春秋の二期に催される学芸会がほかとは比較にならぬ派手やかさであるとか、他府県の展覧会に出品する児童代表は大抵この学校から選ばれるとか、そういったような目立ったことは、すべて右の特色から来ていた。子供の私がひそかに考えていたところによれば、いいとこの家の子達は、総体としてはやはり出来がよかった。大抵の先生は、どっちかといえばいいとこの子達に多く目をかけ勝ちだったが、概して彼等の方が貧しい家の子よりもいい成績をあげているのは、

＊女生……女子生徒。
＊伴侶……仲間。つれ。
＊喧噪……人の声や物音がやかましいこと。
＊師範……教員養成学校。

| 24 中 | 受験番号 |
| --- | --- |
| | |

# 国語　その二（八枚のうち）

あながち先生の依怙贔屓のためばかりではないことを、公平に見て、彼等の反対物である私自身認めなければならなかった。そしてそれはまことにその筈なのであった。――私は少年雑誌の、貧しい家の子の立身出世物語を*耽読しながら、そのなかに、口では云い現わせぬ嘘のあることを、ぼんやり感じ取っていた。物語の事実そのものは信用しながら、それらを取り扱う大人の記者の、誇張、余計な感情というものを、子供心にも感じていた。

このような学校に私がいるということは間違いであったか？　そうとはいえなかった。貧しい*寡婦の一人息子である私が、その学校へ途中から転じて来たのにはわけがあった。ほかの小学校へ入って、丁度一年たったある日、私は母と話をした。――「おっ母さん、附属はね、授業料がいらんのだって。」「授業料がいらんて？　附属が。どうしてまた、そりゃ。」「どうしてか知らんけど、裏の佐々木の春雄さんがそう云ってたよ。」「附属は、お前、お金持の子供の学校だよ。先生もたくさんで、何から何まで行き届いたもんだそうな。すりゃ、ほかより授業料が高くたって、安い筈なんぞありゃしないよ。」――その矛盾している理由は私には答えられなかった。*庁立と市立との違いから来るのだということは、私には答えられなかったが、それが事実とわかっては、母も私の転校を熱心に望まないわけにはいかなかった。毎月の終りに、小さな袋に入れて、十銭を持って行かねばならぬ定めは私には苦痛だった。時によっては先生は、教壇の上から、後れてまだ授業料を納めぬ二三の者のことを、意地わるく名ざして云った。私の名は何時だってそのなかにあった。しかし学校から帰って、そのことを母に云うことも私には出来なかった。

首尾よく試験が受かって転学を許されると、私は今までにも増しておとなしい子になり、よく勉強した。新しい学校の子供達は、美しくて*怜悧だった。多くのことにおいて私は引け目を感じなければならなかった。私は勉強して彼等に勝つのほかはないのだった。学業成績の上で彼等を引き離して行くことは、思って見ただけで、心臓の血が一時に止まりまた激しく流れ出す、復讐にも似たような興奮だった。

――教室中がにわかにしーんとなった。靴音がして、先生方が入って来たのである。

生徒は私の号令で、起立し、一礼し、席についた。

受持ちの青木先生は、新学期の挨拶をし、二人の新しい「*教生先生」を皆に紹介した。師範学校の四年生である教生先生は、一学期毎に交代する。それがすむと、青木先生は、誰かを探すような眼で教室の一方を見やって、

「高山に桜田、こっちへ来て。」と言った。すぐに列のなかから男生と女生が一人ずつ出て、教壇の下の所に立った。先生は、新学年からの新しい友としてその二人を紹介し、「仲良くしてよく勉強するように」と繰り返して云った。

先生の話している間中、赤くなって、うつむいて、もじもじしていた二人が、席へ戻ってからも、私達は激しい好奇心で彼等をじろじろ見ていた。とくに私は強く注意を惹かれた。彼等の一人に私は本能的に

---

＊耽読……夢中になって読みふけること。
＊寡婦……夫と死別して再婚しないでいる婦人。
＊庁立……北海道庁立。
＊怜悧……利口なこと。
＊教生……教育実習生。

| 24 中 | 受験番号 |
| --- | --- |
| | |

# 国語　その三（八枚のうち）

競争者を感じた。私は教室内での私の特別な存在を彼等に*知らしめたくてうずうずしてい、さっき号令をかけた時なども声がふるえそうだった。私が競争者を感じたのは、男生の高山武雄の方にだった。彼のような洋服の小学生というものはその頃はまだ珍らしかった。彼が*才はじけた少年であることは一目で知れた。それに私は、一週間ほど前の新聞で、新にこの地に赴任した大学教授の高山氏について知っている。

一方女生の桜田は又、高山とは別な意味で、何という特別な存在であったことだろう。高山と桜田とが並んで立っている間、私達はその異様な対照に思わず眼を見張らさせられた。彼女の*風体は私よりももっとみじめだった。どんなに貧しくても私は袴をつけていたが、彼女にはなかった。*にこにこ絣の着物は垢で光っていた。脛がまる出しの着物は、なんぼ子供でも余りに短かすぎ、帯にはさんだ手拭いの白さだけがへんに新しかった。顔はでこぼこの感じで醜く、眼がやや釣り上っていた。全体が寒さにかじかんで、伸び切れずにいるというふうだった。彼女は戸まどいしたもののように、間違った所に引き出されでもしたもののように、そこにそうして立っていた。

私は羞じて、自分の顔が赤くなって行くのがわかった。桜田はどうして転学して来たか？　私自身の場合と同じ理由からであろうことを、私だけが感じたのである。

新入生の桜田は、それから暫くの間、陰でいろんなことを言われねばならなかった。第一に彼女の名前がおかしかった。「桜田」という、美しいとも云える名字の下に続く名が、「もい」というのだった。桜田もい、ではなんとなく姓名として筋が通らぬと思われた。それに「子」をつけて、もい子、と呼んだならば一層おかしくはないか。すぐに腕白な連中が、肩と肩とを組んで、「もい子！　もい子！」と怒鳴りながら彼女の前まで押して行って、そこでわーッと叫んで逃げる、というようなことをやるようになった。

ある日、昼の弁当を開く時間だった。お湯が配られてしばらくして、しんとなった時、最も茶目な一人が、突然、自分の食べている箸を頭の上に高くかざして、

「いも子！」と、大きな声で叫んだ。びっくりして皆が見ると、その箸の先には、円い大きな芋の子が一つ、ぷっつり突き刺さっていた。

わッとばかり、笑い声やら怒鳴る声やらがあたりに起った。喜んで、箸で弁当の縁を叩き出すものもあった。物音は次第に広く大きく高まって行って暫くは鎮まらなかった。わあわあ笑う声のなかに、「芋子！芋子」の声があった。みんなあるいはずけずけと、あるいは盗み見するように、桜田もいの方を見た。桜田は、左手で食べかけの弁当に蓋をして、右手に箸を持ったまま、赤くなってしばしうつむいていた。

その日以後、意地わるの子達は、今度は、昼毎に桜田の弁当のおかずをのぞき込むことを楽しみにするようになった。彼女自身が弁当のおかずに芋の子を持って来たのを見つけたならばさぞやおかしかろう。その時は容易に来なかったが、しかしその観察は無駄ではなかった。彼等は日々の桜田の弁当のおかずについて、眼を輝かせ声をひそめて語りあった。漬もの以外を報告することが出来る日は稀であった。生味噌

---

*知らしめたくて……知らせたくて。
*才はじけた……利口な様子が表れた。
*風体……身なり。姿。
*にこにこ絣……安物の布地。

| 24 中 | 受験番号 |
| --- | --- |
| | |

# 国語　その四（八枚のうち）

がそのままの形で飯の*副食物たり得るということの発見は、彼等にとっては一つの驚異だった。

私は彼等の仲間には入らなかった。しかしある朝の運動場での発見の如きは、さすがの私といえど、ひとり自分だけの胸に秘めておくということは到底出来なかった。朝礼に列んだ時、桜田は私の隣りの列で、私のすぐ前にいた。私は彼女の背中をぼんやり眺めていた。私は彼女から発散する一種のにおいに顔をしかめた。それは垢で黒く光っているような、不潔な衣類からのにおいだった。それは同級の誰彼にいつも云われて、彼女が嫌われ、憎まれることの原因の一つになっているものだった。お下げにした赤ちゃけた髪には一筋の藁の切れっぱしのようなものがくっついている……と、私はあるものを見つけて思わず眼を見張った。彼女の襟のところに、灰色の、米粒の小さいようなものが附着していて、どうやらそれがもぞもぞと動いているらしいのを見た時、私はぞっとした。私は虱というものをまだ見たことがなかったが、今それがその虫に違いないと断定しないわけにはいかなかった。

桜田はひとりぼっちで、無口だった。ふだんはそうおどおどしている風もなく、人を正面からじいっと見詰めるというような癖があった。私は彼女を見る時いつも苛立たしさやもどかしさを感じた。またいじらしいような親しさと、憎らしさとを同時に感じた。それらは自分にも分らぬもやもやした妙な気持であった。私は彼女の上に自分の半面を見ているのだった。その家の境遇から云うならば、私達は教室内での二人の異端者として特に目立っていた。――私の彼女に対するこの気持は、やがてもっと複雑なものに深まって行かねばならなかった。

新学期になってから二度目の*綴り方の時間だった。前週、私達が書いた作品に対してその日は先生の講評がある。入って来た先生の手に私達の作品の包みを見ると、私の胸はもう軽く躍った。青木先生は綴り方には特別熱心な先生だった。そして私は綴り方と図画とが大好きであり、またよく出来る生徒とされていた。教室内での私の派手な存在は、主としてその事に依ってさえいた。綴り方の時間に私の作品が皆の前で読まれ、図画の時間に私の作品が、後の壁のラシャ紙の上に貼られるということは、これまで殆ど一度も外れっこなしのことだった。

先生はにこにこしながら、今度のみんなの綴り方には非常にいい文があったと云った。それを読みましょうと云って、何枚も重ねてある一番上のを手にとった。何時ものことながら私の胸は躍らずにはいなかった。今度の「冬の夜」という課題作文は、私には特に自信があったから。

「もらい湯」と、先生は先ずその文の題を読んだ。

もらい湯？　もらい湯とは何だろう。私はまずその題に驚かされた。課題はたしかに冬の夜であった。もらい湯などというのではなかった。が、それは兎も角、最優秀作として読み上げられる作が、私のでないことだけは今や明らかだった。私の胸は忽ち今迄とは違った高鳴りをして、顔がほてって来た。しかし先生は委細かまわず読み進んで行った。誰の作だろう？　内容なんぞはどうでもよくて、私はただそれだけが知りたかったが、先生はまた作者など誰でもいいと云ったふうに、いかにも惚れぼれとした顔と声とで読んで行くのだった。もらい湯などと云っても何のことだか知らぬものが、この教室には多かったことだろう。一日の労働を終えた百姓達の、冬の夜の、もらい湯の姿がそこには描かれていた。まこと、

*副食物たり得る……おかずとなることができる。
*綴り方……作文の授業。

| 24 中 | 受験番号 |
| --- | --- |
| | |

# 国語　その五（八枚のうち）

それは*生けるが如くに描かれていた。暗い、凍るような夜、提灯を下げて、かなり離れている隣りの家までもらい湯に行く。途中で提灯が消え、かじかむ手に息を吹きかけながらマッチを擦る。その家へ行って、さきに湯に入っている者の上るのを待ちながら休んでいる。湯につかって、いい気持になっている者と、外に待つ者との話声までが耳に聞えるようだ。「家へ帰って見ると、肩にかけた手拭いが凍ってかたくなっていて、まるで棒鱈のようだった。」――その一句で先生はその文を読み終えた。それから、ゆっくりと、「これは、桜田もいさんの文です。」と云った。

一瞬、全教室はあッと息を呑んだ。少くとも私にはそう思われた。何かしきりにほめ言葉を云っている先生の声など、私の耳にはもう入らなかった。しかし私の熱した頭には、今読み聞かされた文の世界が、眼に見えるような生き生きとした姿で残っていた。どんなに口惜しくても自分がこの文の作者に及ばないことを私は認めないわけにはいかなかった。冬の夜、という課題に囚われることなく、平気でもらい湯とつけて、しかも誰よりもよく冬の夜の情景を生かしている、その自在さに先ずA兜を脱いだ。私などは冬の夜と云われれば*後生大事とどこまでも冬の夜で、*寒念仏の声とか夜鳴きうどんの声とか、鼠が台所でガタリと云ったというような、せいぜい寒そうな材料を取り揃える以外に能はないのだ。

しかし、それから間もなく、桜田もいが絵に於て、作文に於てよりもより優れた才能を示し、作文では追いつけもしようが、絵では到底比較にも何にもならぬということを知らされては、私はただ茫然とするよりほかにはないのだった。

その頃はまだクレヨンというものはなくただの色鉛筆だった。新しい教生先生の長山先生は*臨画より写生画に力を入れた。そして桜田はその写生画に於て最も遺憾なくその才能を発揮した。五色か六色の安っぽい色鉛筆を使って、素朴な自分自身の眼でとらえた自然を、これも安っぽい、ペラペラな画用紙の上に再現した。*稚拙で破格で、荒削りで、新鮮で、何ともいえぬ魅力があった。同じ色でも彼女が使うと私達とはその色沢がまるでちがって来るみずみずしさだった。*舶来の、十五色一組の色鉛筆に、画用紙も生意気にもワットマン紙などを使って、臨画の時だけはどうにか器用にやってのけていた生徒などは全くB顔色がなかった。丁度*自由画の説が*唱道されはじめていた頃で、その説の熱心な共鳴者であったのであろう、長山先生はすっかり興奮してしまい、あそこへもここへも機会あるごとに桜田の作品を持って出かけ、彼女の天才を称し、その天才を*発揮せしめた自分の図画教育上の確信を述べたのだった。彼女の図画作品は、私達の教室には勿論、教員室にも、児童作品展覧室にも飾られた。それは教育上の参考資料として遠く東京にまで送られ、何かの雑誌の口絵に載ったとも云われた。師範学校の生徒達の同好

*生けるが如く……生きているかのように。
*後生大事……とても大切なものとすること。
*寒念仏……真冬の夜に念仏を唱えて寺にお参りすること。
*臨画……手本を見てかいた絵。
*稚拙……子供っぽくて劣っていること。
*舶来……外国から来た物。
*自由画……題材も手法も自由に選んでかく絵。
*唱道……言い出すこと。
*発揮せしめた……発揮させた。

| 24 中 | 受験番号 |
| --- | --- |
| | |

# 国語　その六（八枚のうち）

者の集り、ポプラ画会が、町で公開の展覧会を開いた時には、特に彼女の色鉛筆作品も三四点掲げられた。

すべてのなかで、一番みじめなことになったのは、勿論私であった。

この汚ならしい、虱たかりの小娘のために、私は一ぺんで王座から転げ落されてしまった。二人の新入生を見た時、私が直感した競争相手というのは、実はこの小娘の方であったのだ。教授の息子、高山武雄の如きはものの数でもないことが次第に明らかになって行った。同時に、時が経てば経つほど、桜田もいは恐るべきで、到底太刀打ち出来ぬ相手であるということも明らかになって行った。彼女は綴り方と図画のみならず、ほかの学科だってみな人並以上なのだ。ただ授業時間中に、「わかっている人」と先生に訊かれて、ほかの者達のように、「ハイ、ハイ、ハイ」と、金切声で叫んで手を挙げることをしないというだけなのだ。

桜田が女だということは、私にとってはむしろ幸いであったろう。もしも彼が男であったならば、私はもっとたまらなく切ない競争心と*敵愾心に、胸を焼いたに違いないのだ。私の負けることの口惜しさは、女なんぞに負けて、ということとは違っていた。むしろ私は、次第に諦めて、男生では私、女生では桜田、という気持に落ち着こうとしているのだった。

桜田が有名になるにつれて、彼女についての色々な噂が私の耳にも入って来るようになった。彼女は私達の学校の在る区域に隣接した村の百姓家の娘であるということだったが、これは曽つて彼女の髪の上に見た藁屑と、彼女の綴り方が描き出す世界からも知れることである。彼女が附属小学校の編入試験を受けた時、試験官の先生も思わず小首をひねったということだった。口頭試問に呼び出して見ると、甚だしい家の貧しさが身なりの上にまで余りに露骨なので、この学校の性質から、彼女自身のためにもどうかと思案させられたのである。しかし学科がいかにもよく出来るので、どうしても落すわけにはいかなかった。

私は桜田に対して、複雑な気持を持ち続けた。敵愾心を燃やしながらも、彼女に対して拍手を送らずにはいられぬ気持を始終経験した。彼女が何かでC味噌をつければいいなどと考えたことは一度だってなかった。誰よりも私こそ彼女の仲良しになれる、またならねばならぬのだということを、感じていた。彼女を傷つけず、しかし私は彼女を追い抜きたかったのだ。私は素直な蟠りのない気持で、まっすぐ彼女の顔を見ることが出来なかった。物心ついて初めて味わった苦しみだった。

（島木健作『随筆と小品』昭和十四年刊による。かなづかいと漢字表記は改めたが、表現については原文を尊重した。）

---

*敵愾心……敵と張り合い、倒そうとする闘志。敵対心。

| 24 中 | 受験番号 |
| --- | --- |
| | |

# 国語　その七（八枚のうち）

問一　「師範の附属小学校というのは町の多くの小学校のなかにあって特別な色彩を持っていた」とあるが、「特別な色彩」とはどのようなものですか。

問二　「私は今までにも増しておとなしい子になり、よく勉強した」とあるが、それはなぜですか。

問三　「私は羞じて、自分の顔が赤くなって行くのがわかった」とあるが、桜田を見て「私」がはずかしくなったのはなぜですか。

問四　二重傍線部A～Cの語句の本文中での意味として最もふさわしいものを、それぞれ（ア）～（エ）から一つ選び、記号で答えなさい。

A「兜を脱いだ」
（ア）驚いた
（イ）感心した
（ウ）警戒心が薄れた
（エ）降参した

B「顔色がなかった」
（ア）思いどおりにいかず不機嫌になった
（イ）力を見せつけられて元気がなくなった
（ウ）見向きもされない平凡な存在になった
（エ）自分に関係がないと無関心をよそおった

C「味噌をつければいい」
（ア）喧嘩をしかけてくればいい
（イ）失敗して恥をかけばいい
（ウ）自分の負けを認めればいい
（エ）得意になっていればいい

| A | |
| --- | --- |
| | |
| B | |
| | |
| C | |
| | |

| 24 中 | 受験番号 |
| --- | --- |
| | |

# 国語　その八（八枚のうち）

問五　「私は一ぺんで王座から転げ落（おと）されてしまった」とあるが、どういうことですか。

問六　「敵愾心（てきがいしん）を燃やしながらも、彼女（かのじょ）に対して拍手（はくしゅ）を送らずにはいられぬ気持（きもち）を始終経験した」とあるが、どういうことですか。

## 二

次の各文の**カタカナ**を漢字に直しなさい。

① 毎年**キョウリ**に帰る。
② かろうじて**メイミャク**を保った。
③ **ジュウオウ**に飛び回る。
④ こまめに水分を**ホキュウ**する。
⑤ **ジュンシン**な気持ちを持ち続ける。
⑥ 雑草が**ムラ**がって生えている。
⑦ 紛争（ふんそう）の**チョウテイ**に乗り出す。
⑧ 経験豊かな監督（かんとく）の**ロウレン**な指揮。

| ① | ② | ③ | ④ |
| --- | --- | --- | --- |
| | | | |

| ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ |
| --- | --- | --- | --- |
| | がって | | |